



国宝 火焰土器

左の写真は縄文土器でただ一つ国宝に指定されている「火焰土器」です。今から5,000年ほど前の縄文時代中期中頃の遺跡である長岡市の馬高遺跡で、1936年に発見された土器ですが、信濃川沿いには同時代の多くの遺跡から同様の土器が出土しています。この地域は冬のあいだ降り積もった雪が解けて浸み込み、湧き水が大量に出る場所ができ、人々はこうした湧き水の近くに集まってムラを作り定住を始め、その規模と密度は日本有数で、周辺のムラと交流、交易をしながら、火焰土器文化圏ともいえる大規模な「火焰のクニ」を形成したと考えられているそうです。

世界各地の土器は容器として使われているのが一般的ですが、縄文土器は鍋(調理用具)として使われていたことが実証されています。豪華な装飾を持つ火焰型土器も例外ではなく、その内面には「おこげ」の痕が確認されています。

狩猟・採集生活をしていた列島の人々が、渋くて食べられなかったナラやシイの実であるドングリを、加熱することで灰汁抜きをして食糧に位置付けたことは、その後の縄文人の生活をどんなに豊かにしたことでしょう。保存のし難い魚や動物の肉も、加熱することで多少の菌を無毒化したでしょうし、何より味覚の幅を広げたことでしょう。

この頃は男が狩りに出かけて獲物を捕まえ、土器づくりの担い手は主に女性だったと考えられていますが、火焰型土器のような迫力ある土器が女性によって作られていたのは驚きです。母から娘に作り方が伝えられていったはずですが、見るからに複雑そうなこの土器は、習得するまでに何度も失敗を繰り返したのではないのでしょうか。

下の図面はレジメの18ページ早期土器編年表のI-3期の大川式と、I-4期の神宮寺式の土器片の文様です。レジメの表では近畿と山陰に、これらの土器が分布していることが分かります。素人には両者の違いは明確には分かりませんが、近畿と山陰の両地域で「大川式から神宮寺式に変化している」と研究者は判断しているようです。と言うことは、起点がどちらかは分かりませんが、一方から他方へ土器づくりの情報が伝わったこととなります。この縄文早期の時代には、列島にいる縄文人は最盛期(中期)ほど多くなく僅か数万人と推定されており、その大多数は関東・東北に集中していたと思われるので、山陰には多くても数千人くらいです。一昨年の柳浦先生のレジメでも山陰の縄文人口は最盛期(中期)でも千人以下と試算されていますし、早期はさらに少なかったと思われます。情報が伝達されるには媒体、つまり伝える人が必要ですが、このような疎らな集団間に土器づくりの情報がどのように伝達されたのでしょうか。

早期の縄文人は生涯に何度、自分らの集団以外の人に会ったでしょうか。一昨年のレジメにあった「斐伊川・神戸川上流域の縄文集落想像図」にあるように、当時のムラは血縁を中心とする数軒の小規模な集団が川筋に沿って散在し、川筋ごとの複数の集団で構成されると推定されていました。彼らは年に何度か拠点となる集団の居住地に集い、親交を温め

様々な情報交換をしたと思われます。偶然か或いは必要があって、隣りの川筋のムラとも交流をしていたし、さらに遠くの地域にも人々が暮らしていることを情報として持っていたと考えられます。しかし、土器の文様は伝えなければならない情報とも思えないので、他の必要な情報交換のついでに断片的に伝えられたでしょう。僅かな情報の度重なる蓄積で文様は伝播されるのではないかと思います。ヒトの寿命から見て永遠とも思える時間の積み重ねが、集団密度の希薄さを補うのでしょうか、正直ピンとこないほど当時の縄文人口は少ないようです。

